



フィリピンの語学学校で留学生仲間たちとの一枚



カンボジアのインターンシップ先で、現地農家の方と



カンボジアのスラム街に住む呑み仲間たちと



陵水海外体験記

経済学部四回生

河合 将利

人生の転換点

大学でのゼミとの出会い、これが私の人生の転換点でした。大学3年次、学内屈指のグローバルゼミで志高い仲間たちと切磋琢磨するうちに、漠然と考えていた「世界を舞台に活躍したい」という気持ちが確信に変わりました。この想いを実現させる為に、

座学で語学の勉強を進め、3年次修了後には大学を1年間休学し、フィリピン留学とカンボジアでのビジネスインターンシップに挑戦しました。

フィリピン流超スパルタ学校での語学留学

まずはフィリピンで半年間の語学のトレーニングを積み、実践的な語学力の獲得を目指しました。

高山地帯にポツンと建てられた、監獄と呼ばれる語学学校での日々はまさに囚人にもなった感覚でした。週末に少し離れた街で留学生仲間とお酒を呑むこと、それ以外に娯楽と呼べるものはありませんでした。しかし、そんな環境であったからこそ、想像以上の英語漬けの日々に没頭できました。

半年間の語学留学を終えた頃には、期待以上の語学力の伸びを実感することができました。

ASEAN最貧国カンボジアへの挑戦

その後の5ヶ月間、カンボジアで野菜の生産販売に関するインターンシップに挑戦しました。

きっかけは、大学2年次にゼミの教授から推薦して頂いた「NHK映像の世紀」という特番を観て、新興国が抱える貧困問題や食糧問題に興味を抱いた事でした。この

マーケットして注目されていくと考えて、ASEAN最貧国カンボジアへの挑戦を決意しました。

情熱モニスターの本領発揮

『Adversity is the best school.』

インターンシップ内容は、現地農家のマネジメント、新規顧客獲得に向けた飛び込み営業、コスト削減策の立案でした。

しかしながら、そんな通常業務でさえもにも行える環境ではありませんでした。理由は、従業員間の関係性の複雑さから、情報伝達が円滑に行われていないことが原因で発注ミスが絶えず、朝から晩までトラブル処理に追われてしまうからです。

そこで、ソフト開発を行う現地企業との契約に踏み切りましたが、言語や文化の壁に阻まれ、交渉は難航を極めました。現地スタッフに協力を求めても、「これ以上業務が増えるのは嫌だ」と、ここでも突っぱねられてしまいました。絶望的な状況でしたが、諦めずに熱意を伝え続けることでスタッフと協力関係を築き、交渉にも同行してもらい、何とか交渉をまとめる事に成功しました。

こうして導入したソフトの効果は絶大でした。スタッフ間の情報共有は効率化され、発注ミスもほとんどなくなりました。通常業務に戻れた私は、デリバリーの外部委託と新規サプライヤーの発掘にも成功し、4割のコスト削減に貢献出来ました。

ささやかな取り組みでしたが、自ら働きかけて異なる価値観の人々を巻き込み、課題解決を実践した、そんな貴重な経験となりました。そして、新興国の過酷な現状とそこに住む人々の情を全身で受け止められたことは、今後の人生設計に大きな影響を与えてくれると確信しています。

思いから、学生のうちに現地に飛び込んで新興国の実態や課題を体感し、将来自分が進むべき方向性を探ることに決めました。そこで、急速に経済成長を遂げつつあることから今後益々